

研究紀要

第24号

埼玉県文化財収蔵施設保管の石器
—荒神脇遺跡出土の石器—

西井幸雄

低地遺跡から見た関東地方における古墳時代の始まり

福田 聖

製作技法・表現手法からみる東日本出土瓦塔

坂田敏行

埼玉県白岡町タタラ山遺跡出土石製品の鉍物分析

奥野麦生 大屋道則

横山産玉髓質泥岩の加熱による色調変化

大屋道則 高田秀樹
古西里美

石器材料及び石器の理化学的分析値(4)
—XRFによる黒曜岩分析値(2008年度)—

大屋道則 上野真由美
早坂広人 加藤秀之

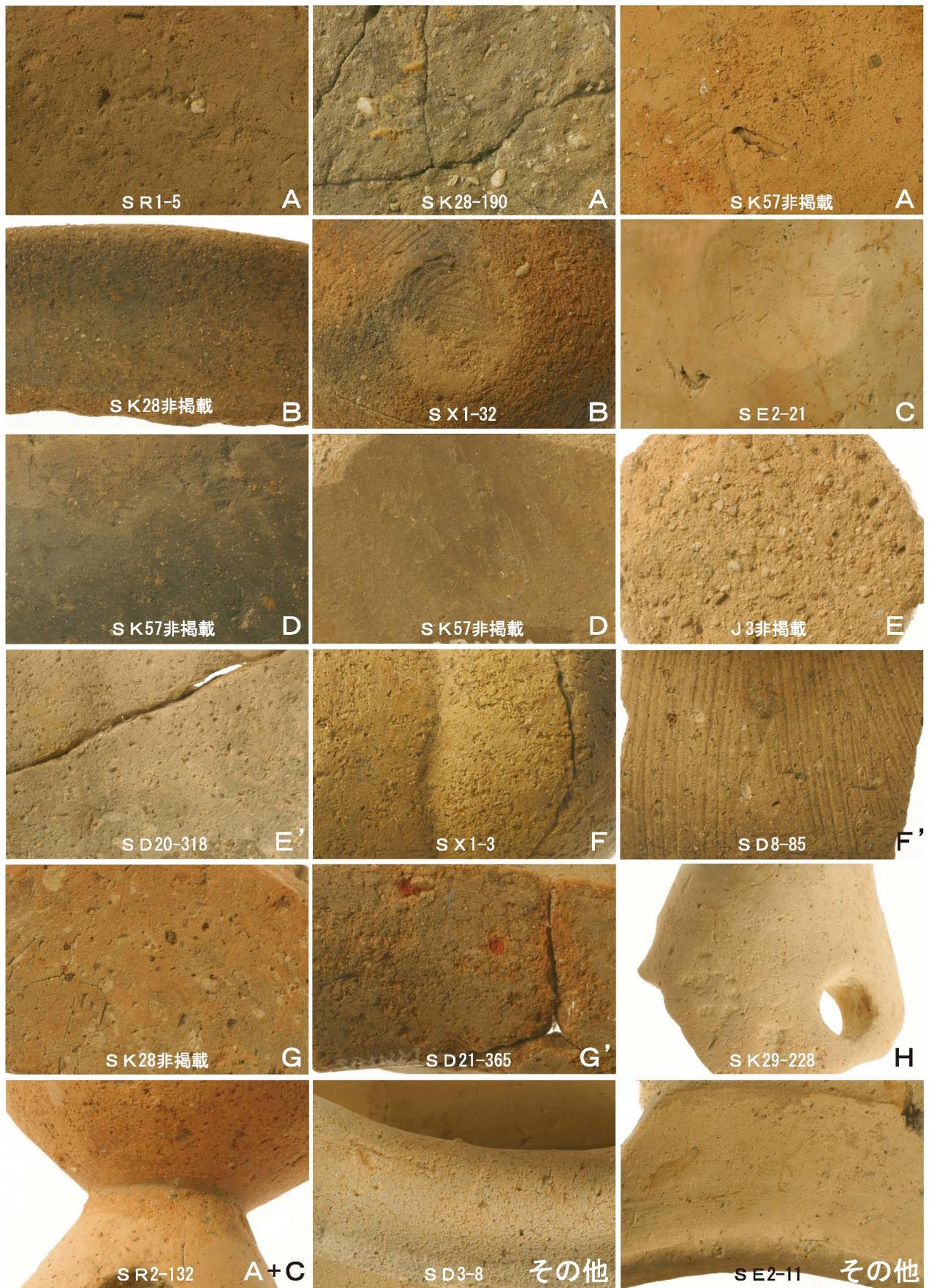
神矢考
—反町遺跡祭祀跡に見る古代歩射神事—

劔持和夫

2009

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

口絵 1



白井沼遺跡の胎土（栗岡2007より転載）



13 talc



17 talc



20 talc



19 talc



04 talc



08 talc



27 talc



09 talc



11 talc



36 talc



12 talc



14 talc



37 talc



15 talc



18 talc



38 talc



31 talc



34 talc



41 talc



35 talc



40 talc



01 talc



21 talc



24 talc



28 talc



25 talc



02 talc



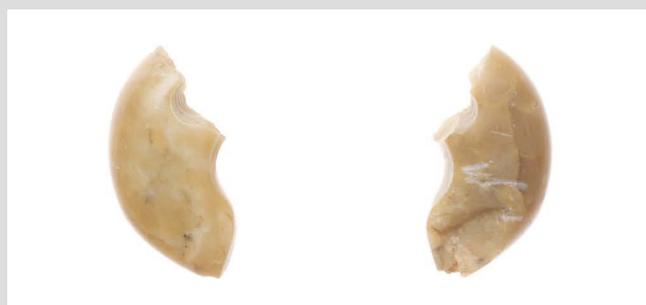
32 talc



41 talc



10 pyrophyllite



05 talc



33 pyrophyllite



29 talc



06 muscovite



39 clinochlore talc



07 muscovite



23 quartz kaolinite



22 quartz clinochlore muscovite



26 quartz



03 clinochlore



16 不明



1 玉髓質泥岩原石001 非加熱



2 玉髓質泥岩原石001 100℃ 2h



3 玉髓質泥岩原石001 200℃ 2h



4 玉髓質泥岩原石001 300℃ 2h



5 玉髓質泥岩原石001 400℃ 2h



6 玉髓質泥岩原石001 500℃ 2h



7 玉髓質泥岩原石001 600℃ 2h



8 玉髓質泥岩原石001 700℃ 2h



9 玉髓質泥岩原石001 800℃ 2h



10 玉髓質泥岩原石001 900℃ 2h



11 玉髓質泥岩原石001 1000℃ 2h



12 曾々木流紋岩原石17-01-122 非加熱



13 真脇遺跡出土石器 1



14 真脇遺跡出土遺跡 2



15 真脇遺跡出土石器 3

目次

序

埼玉県文化財収蔵施設保管の石器 西井幸雄 (1)
— 荒神脇遺跡出土の石器 —

低地遺跡から見た関東地方における古墳時代の始まり 福田 聖 (5)

製作技法・表現手法からみる東日本出土瓦塔 坂田敏行 (27)

埼玉県白岡町タタラ山遺跡出土石製品の鋳物分析 奥野麦生・大屋道則 (61)

横山産玉髓質泥岩の加熱による色調変化 大屋道則・高田秀樹・古西里美 (75)

石器材料及び石器の理化学的分析値 (4) (81)
— XRFによる黒曜岩分析値 (2008年度) —
大屋道則・上野真由美・早坂広人・加藤秀之

神矢考 劔持和夫 (126) (1)
— 反町遺跡祭祀跡に見る古代歩射神事 —

埼玉県白岡町タタラ山遺跡出土石製品の鉱物分析

奥野 麦生¹⁾ 大屋 道則

要旨 石器や石製品には様々な材質の岩石が用いられているが、考古学的な取り扱いに際して、多くの場合には岩石や鉱物の名称は肉眼的な特徴から経験的に判断されている。埼玉文では、考古遺物としての石器や石製品の材質名について平行ビーム法によるX線回折を利用して継続的に調査を行っている。今年度は埼玉県白岡町タタラ山遺跡出土の玦状耳飾を中心とした石製品について、それぞれの遺物に含まれている鉱物種の同定を行った。その結果、主体は滑石であり、他に幾つかの鉱物種が確認できた。

はじめに

埼玉県内の石器や石製品の材質の様相を理解するためには、原石を含めて多くの岩石について幅広く分析を進めてゆくとともに、より多くの遺物について正確な鉱物名を決定してゆくことが必要である。

ここでは、埼玉県白岡町タタラ山遺跡出土の石製品について平行ビーム法によるX線回折を実施し、非破壊での鉱物の同定を行った。

1 資料

1.1 被験試料

被験試料は全て埼玉県白岡町タタラ山遺跡出土の遺物である。

タタラ山遺跡は、大宮台地の白岡支台西縁部、足下に元荒川の形成した沖積低地を臨む台地上に位置する。これまで8次に及ぶ発掘調査が行われ、縄文時代前期花積下層式期を中心とする集落遺跡であることが把握されている。被験資料は、第2地点出土の38点のほか、第1地点出土の2点、第5地点出土の1点を含めた総計41点である。

タタラ山遺跡出土の装飾品には、大きく玦状耳飾、垂飾、管玉類の三者がみられる。これらはほぼ全てが花積下層式期に帰属するものと考えられる。住居跡、土壙などの遺構から出土した例も多く、2号(1次調査)、32号、35号、37号、41号、47号の各住居跡で複数の装飾品類が出土しており注目される。

1.2 玦状耳飾(第1図)

玦状耳飾は21点あり、そのうち7点は破損した耳飾の破片に両面から穿孔を施し垂飾に再加工しているものである(14~20)。これらについては、垂飾として後述する。

本遺跡の玦状耳飾は、径15mm~30mmほどの大きさの範囲に収まる比較的小振りのものであり、玦状耳飾A、玦状耳飾Bの2者に大別することができる。

玦状耳飾A:

主穴を開けたあとの器肉と器厚が同程度となるもの(1、2、4、5、7、9、10、12、19、20)

玦状耳飾B:

器厚のほうが厚くやや筒状となるタイプ(3、6、8、11、13、14~17、41)

1) 埼玉県白岡町教育委員会

製作方法は、両者とも中央部の主穴を両面から穿孔し、さらに穴の中を研磨してきれいに整えている。挟りの部分は、擦り切りによってあけられている。表面は面をとるようによく研磨されている。

玦状耳飾Aのなかには、中央部の主穴のほかにも小さな穴をあけるものがある(1、4、5、10)。この小穴が、破損後、再加工されたものか、完形品の段階ですであけられていたものか明確ではないが、他遺跡の事例には穿孔された完形品も確認されているようであり、穿孔されるものとされないものがあることが窺われる。

1.3 垂飾(第1・2図)

総点数は、19点である。もともと垂飾として製作されたと思われるもの(21~32)と、玦状耳飾を再生転用したもの(14~20)とがある。便宜的に前者を単に垂飾、後者を転用垂飾と呼ぶこととする。

垂飾は12点確認されている。21~23は第2地点35号住居跡出土のもので、21は、鳥を象ったものと思われる。上部中央に両面から穿孔され、対峙する端辺に擦り切りによって鋸歯が施される。22と23は、小形の扁平礫の上部中央に両面穿孔を施しただけのものであり、特に研磨等の加工はみられない。24、25は、32号住居跡出土資料で、同じ様な縦方向の粗い研磨痕が観察される。幅、器厚も近似しているが同一個体ではない。一対のものであった可能性もある。26は円形の扁平な自然礫を素材としている。まだ穿孔途中の未成品である。27は、紡錘形に研磨されたもので、右側辺に浅い溝が彫られており特徴的である。孔は、両面からの穿孔である。28は短冊形のもので、両面非常に丁寧に研磨されている。長軸方向に彎曲する。29は素材剥片の形状をあまり整えず研磨しているもの、20は釣鐘形の形状のものであ

る。いずれも全面研磨で両面から穿孔が施されている。31、32は両側面から穿孔が施されるものである。前者は側面から穿孔した上端部が欠損し、上部中央に穿孔し直している。後者は巴形となるもので他に例を見ないめずらしい形状である。

垂飾は、形状、整形、穿孔方法などの観点で類型化することができる。32をデフォルメした動物の形と見ることができるとすれば、21の鳥形とともに動物を現す事例として括ることができる。これとは別に24、25、28など短冊形の定型的な事例として分類できよう。技術的な面から分類すれば、側面穿孔の31、32などがめずらしい事例として挙げられよう。どのような分類が有効なのかどうか今後さらに類例集成の上検討したい。

転用垂飾は7点確認されている。欠損した玦状耳飾の側面に孔を穿ち垂飾に再生転用したもので、玦状耳飾Aを転用したもの(18~20)と玦状耳飾Bを転用したもの(14~17)とが見られる。便宜的にそれぞれA類、B類としておく。

A類 18は、比較的径の大きい扁平な玦状耳飾であったものと思われ、玦状耳飾Aとやや趣を異にする。あるいは、もともと曲玉風の垂飾として作られた可能性も否定できないが本類としておきたい。19は、全面よく磨られており、欠損前の玦状耳飾の形状を多く留めるものではないが、大きさ、弧の描き方などから転用垂飾と判断した。20は、内面下端に擦り切りによる挟り部が残されており、玦状耳飾Aを転用したことがはっきりわかる例である。玦状耳飾Aの小孔の穿孔は表裏面からおこなわれることから、18、19の上部中央の穿孔が、欠損後に穿孔されたものか欠損前の穿孔を利用したものかは不明であるのに対し、20は、ほぼ中央に側面から穿孔したも

ので、瑛状耳飾Aに穿たれる小孔とは別のものであることがわかる。本資料の穿孔は、欠損後B類の技法でおこなわれたものと思われる。

B類 14は比較的軟質の素材が用いられており、周縁部を中心に欠損が目立つ。内面下端に擦り切りによる抉り部が観察される。15は、上部の割れ口を粗く研磨し、縦長の短冊形に形状を整えている。上部中央に穿たれた小孔は、やや斜め内向きとなる。16、17は15mm内外の器幅に対し11～13mmほどの器長となるやや横長の資料である。穿孔位置も外側では上部でも、中側ではほぼ中央となり、垂下させた場合、やや不安定になるものと思われる。

本類垂飾に穿たれた垂下用の小孔は、総じて側面に開けられている。これは、単純に器肉が薄い筒長の器体に穿孔する場合、側面からの穿孔の方が合理的であったことが理由として挙げられようが、A類20のような事例もあることを考えると何らかの約束ごとや規制が働いていた可能性もあろう。

1.4 管玉・小玉類 (第2図)

総点数は6点で、内訳は管玉4点(33～36)、小玉2点(37、38)である。

管玉 33は乳白色で、器面は非常に丁寧に研磨されている。孔の径も大きく肉薄に仕上げられているが両端は斜めに切れており、欠損後再生した可能性もある。34～36は両面穿孔の痕跡を顕著に残す肉厚な作りで、33に比べ径も大きい。両端はきれいに揃えて整形され、器長は33を含め20mm内外で規格性が認められる。

小玉 37は、非常に小形で断片であるが、わずかに穿孔部分が残存している。38は小玉としたが算盤玉状に研磨整形されている。穴は、両面からの穿孔である。資料数も少なく不明な部分が多いが、黒浜式

期に散見されるような白玉風の資料は窺われない。

1.5 玉素材断片 (第2図)

39、40の2点である。39は、第41号住居跡のピット内からの出土であり、住居の時期に属するものと考えられる。両者とも研磨、穿孔などは加えられておらず、素材断片の域を出ないが、装飾品類が通常製品として流通したと見られることを考えると、タタラ山遺跡において、石製装飾品類が製作されていた可能性を示す資料として重要である。

1.6 まとめ

タタラ山遺跡からは、既に40点を上回る石製装飾品類が出土している。点数的にも同時期の集落遺跡と比較して破格の出土量であるといえよう。また35号住居跡出土の鳥形の垂飾や、47号住居跡出土の巴形の垂飾などは秀逸で、デザインの妙、造形としての美しさとともに製作にかかる高い技術水準が窺われる。また、出土状態から住居跡出土の資料が多いことも特徴として挙げられよう。とかく、墓壇出土のセット資料ばかりが目立ち、副葬品としての捕らえられ方が強かったように思われるが、それだけではないとの事例を提示できたものと考えている。

こうした中で、垂飾のあり方が注目される。垂飾は全部で19点出土し、通常の垂飾が12点、転用垂飾が7点出土している。出土地点に注目すると12点出土した垂飾は24号土壇出土の1点を除きすべて住居跡からの出土である。24号土壇は中期の土壇であり、同土壇が切っている10号住居跡の遺物である可能性が高い。もしそうだとすればすべてが住居跡出土の資料ということになる。一方、7点の転用垂飾については、3点が土壇、1点が炉穴出土である。炉穴出土の1点は1号炉穴出土の第1図16であるが、第1号炉穴と重複する1号土壇(ともに五領期



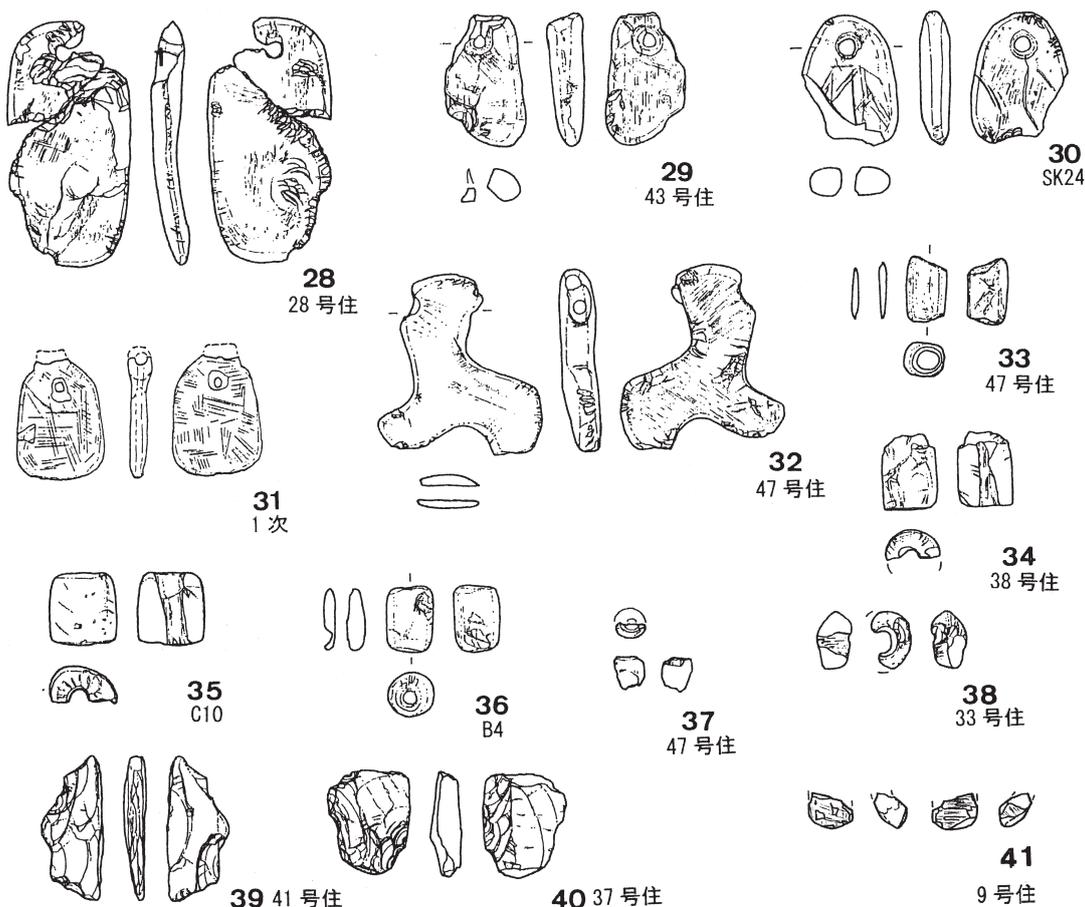
第1図 タタラ山遺跡出土の石製装飾品 S=1/2 (報告書より転載)

の7号住居跡によって上層を攪乱されている)に帰属する可能性が高い。1号炉穴が早期子母口期の所産であることからそのように推測される。分母がわずか7点であることを考えると、断定的に「過半数が土壙出土となる。」とは言いがたいが、現象的には住居跡出土資料は1点もないこととなり、12点すべてが住居跡出土の垂飾とは、対照的な出土状況を示すこととなった。このことがどのような意味を持つのかは、さらに類例の蓄積を待ちたいと思うが、使われ方に違いがあった可能性を示唆する一つの事例として提示しておきたい。

なお本稿は、タタラ山遺跡第2地点の発掘調査報告書の考察部分を再編したものである。遺構や出土遺物との関係を含め、原報告と併せてご検討いただきたい。

また、41については、遺存率が低く報告書では図化対象からはずしたものであるが、本資料群が一括して町指定文化財に指定されたこともあり、今回あわせて図を示し分析対象としたものである。

原報告：奥野麦生 2008 『タタラ山遺跡—第2地点—』白岡町遺跡遺跡調査会



第2図 タタラ山遺跡出土の石製装飾品 S=1/2 (報告書より転載) ただし41は新たに図化

表1 X線回折装置の設定

ターゲット：Cu	モノクロ受光スリット：なし
管電圧：40kV	走査モード：連続
管電流：40mA	サンプリング幅：0.02°
カウンタモノクロメータ：固定	走査範囲：3~90°
カウンタ：シンチレーションカウンタ	積算回数：1回
発散スリット：0.5 mm	スキャンスピード：4°/min
発散縦制限スリット：10mm	走査軸：2θ/θ°
散乱スリット：解放	θオフセット：なし
受光スリット：解放	光学系：平行ビーム法

2 分析操作

2.1 機器の設定

X線回折装置は、理学電気製 RINT2100ultima+/pc を使用し、分析時には集中法光学系から平行ビーム法の光学系に設定を変更した。

集中法の光学系による測定では、加圧した試料の平面性と位置が重要であるが、平行ビーム法光学系では、集中法光学系に比べれば許容範囲は広い。また遺物の持っている面そのままが測定対象となるので、面の選択は可能であるが、遺物であるので研磨などによる表面状態の調整はできない。従って遺物の状況により、同一の材質であっても回折線の強度は異なる。

また、微細な結晶が無秩序な方向性で多量に含まれる岩石では、比較的良好な回折線が得られるが、変成作用や続性作用によって結晶が配向したような岩石を対象とした場合、あるいは比較的大きな少数の単結晶が測定面に存在していた場合には、非破壊での平行ビーム法光学系では、特定の回折線が強調されたり、表れにくかったりする場合があります、注意が必要である。

測定結果に問題があると判断した場合には、測定位置のみを変更して再測定を行ったが、必ずしも含まれている鉱物種を同定できない場合もあった。その場合には、不明とした。

具体的な装置の設定条件を表1に示した。

2.2 回折結果の解析

X線回折の結果は、回折角度毎のX線強度として得られるが、この解析にあたっては、通常は判別の為の専用ソフトがデータベースとの照合を行い、候補となった物質名を画面に羅列する。ただし、専用ソフトが示してきた各鉱物名候補について、データベースに登録されている回折線の位置と強度を測定値と比較して、実際に候補の中から同定を行うのはオペレータである。この時に粉末法の場合には原則として無定位試料なので、ピークの強度自体も判別のための情報になり得るが、考古遺物を非破壊で分析する際の平行ビーム法では、通常は配向した試料をそのままのかたちで取り扱うために、各ピーク毎の回折線の強度は、結晶の配向の仕方に左右されてしまい、データベースに登録された標準的な強度を示さないことが多い。従って、いくつかの弱い回折線がバックグラウンドのノイズに埋もれてしまい、一部の回折線しか検出できない場合もある。そのような場合には、本来的には何回か遺物の位置を変えて測定し、他の回折線を確認するか、あるいは遺物を回転させて測定する事が望ましい。

なお、ほとんどの鉱物は固溶体を形成するが、X線回折によって得られた回折角度は、結晶中の原子間の距離を反映しているため、固溶体組成の違いは、回折角度の微妙な違いとなって現れてくる。データベースに登録されている固溶体の数はさほど多くはないが、それに対して実際に岩石中に存在している鉱物の固溶体組成は多様である。したがって、照合結果として提示したデータベースに記載されている固溶体組成は、必ずしも試料の固溶体組成を正確には反映していない。

なお、判別のためのソフトはJADE6.0を、回折線のデータベースはICDD-PDF DataSets 1-51 plus 70-89 Release 2001を利用した。

3 結果

結果は表2、3にまとめ、遺物毎に根拠となるプロファイルを示した。なお、今回はバックグラウンドを除去せずに表示した。また標準物質のSiは同時に測定しなかった。

1、2、4、5、8、9、11~15、17~21、24、25、27~32、34~38、40、41は、talcであった。

幾つかの色調に分けられる。

1、8、27は、磨くことによってかなり強い光沢が見られる透明感のない漆黒の talc であった。

4も透明感がなく漆黒ではあるが、前者ほどは光沢が強くない talc であった。

15、21、25、30は、磨いてもあまり光沢が強くない不透明で灰黒色の talc であった。

11、13、17、18、31は、何れも黒褐色で透明感のある talc であり、18は他の4点に比べるとやや色調が淡く、淡黒褐色であった。

5、9、37は、淡褐色で僅かに透明感がある talc であった。1~3mm程度の黒色粒子を含んでいた。淡褐色の地にやや淡色の部分が墨流し状に見られた。強い光沢が認められた。

19、24は肌色であり、24は部分的に緑色を帯びている talc であった。多少光沢が見られた。

20、28、29、36、38は、緑色を帯びていることが比較的明瞭な talc であり、肌色から淡褐色の部分が見られた。36では、透明感がなく光沢が強い緑色の部分と、透明感のある淡肌色の部分が層状に見られた。38はやや透明感があり、他は僅かに透明感があった。

2、12、14、32、34、35、40、41は、白色から濁白色で僅かに肌色を帯びるものが見られる talc であった。

39は、talc と clinochlore が検出できた。両者が同時に検出できた例がいくらか見られることから、talc と clinochlore はしばしば同一の岩石中に生じることが明らかである。

10、33からは、pyrophyllite が検出できた。10は、やや緑色を帯びた肌色、33は肌色で、両者共に光沢が見られた。

6、7からは、muscovite が検出できた。6はやや緑色を帯びた肌色、7は肌色で、6は僅かに光沢が見られ、7は明瞭な光沢が見られた。

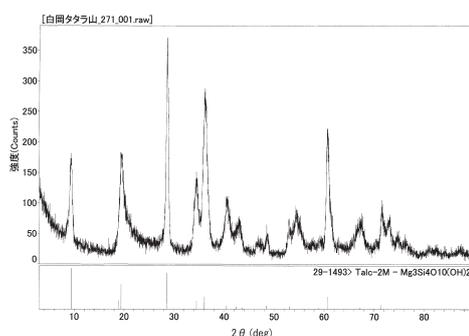
23からは、quartz と kaolinite が検出できた。褐色で軽質の岩石であり、砂岩若しくは泥岩等の堆積岩と考えられた。光沢は見られなかった。

26からは、quartz が検出できた。23同様に褐色で軽質の岩石であり、砂岩若しくは泥岩等の堆積岩と考えられた。光沢は見られなかった。割れ口はやや淡色であり、表面の色調は鉄分の付着によると考えられた。

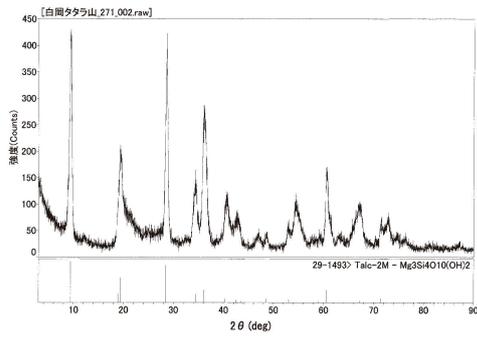
3からは、clinochlore が検出できた。色調は部分的に濁った緑色や茶色を帯びた淡灰褐色で、光沢が見られた。

16は、かなり軽質であり、X線回折のプロファイルは、ringwoodite に類似するが、ringwoodite であるとは考え難いため、取りあえず鉱物名は保留したい。かなり軽質である点から岩石ではない可能性も考慮する必要がある。バックグラウンドがやや高く、非晶質を多く含む可能性も考えられる。

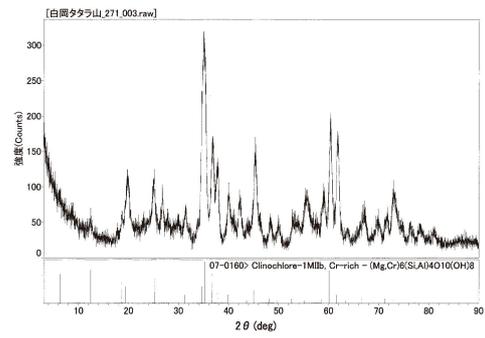
22は、quartz、clinochlore、muscovite が検出できた。黒色で薄く、全体に丸みを帯びており、堆積岩か変成岩であると考えられた。



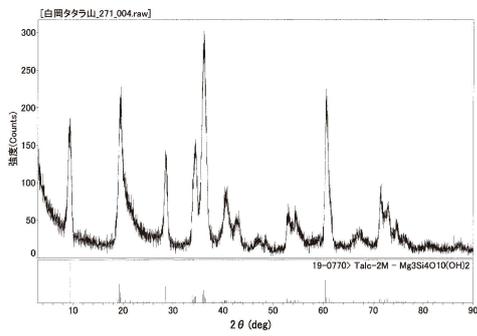
第3-01図 タタラ山01



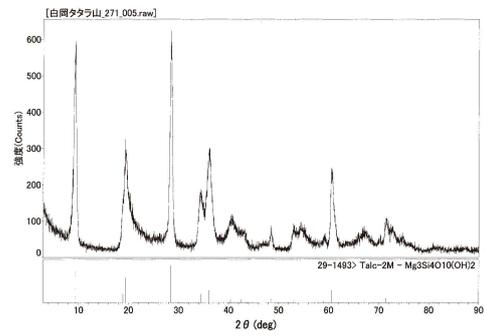
第3-02図 タタラ山02



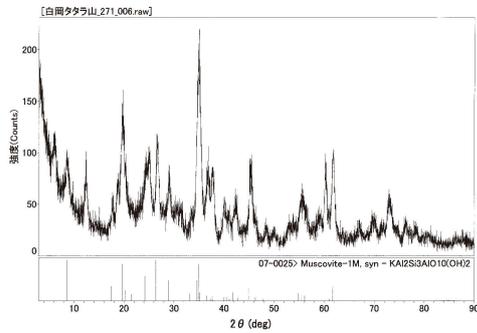
第3-03図 タタラ山03



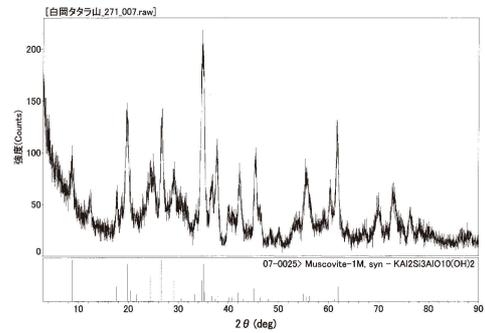
第3-04図 タタラ山04



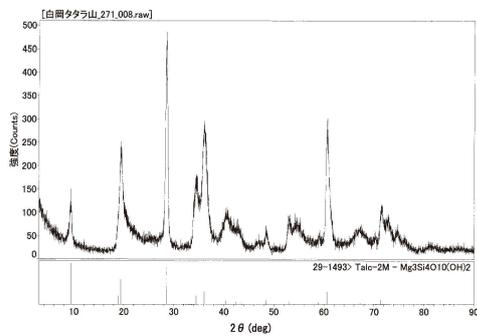
第3-05図 タタラ山05



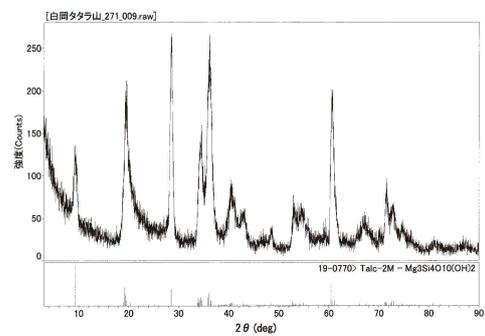
第3-06図 タタラ山06



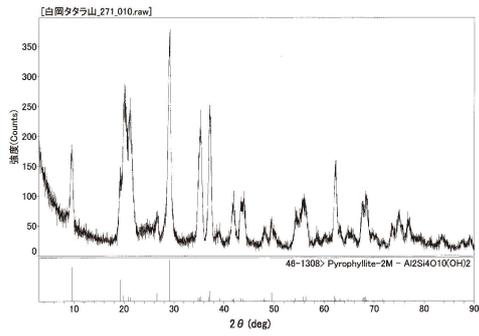
第3-07図 タタラ山07



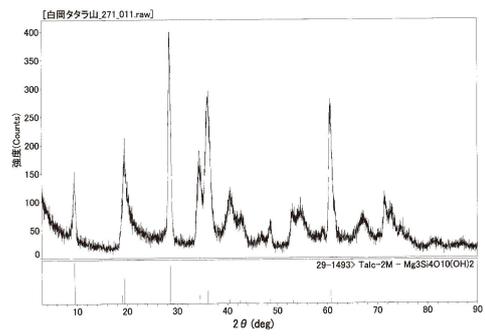
第3-08図 タタラ山08



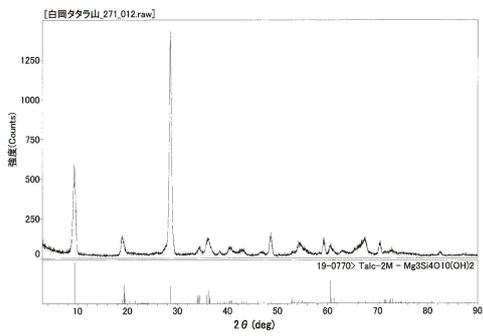
第3-09図 タタラ山09



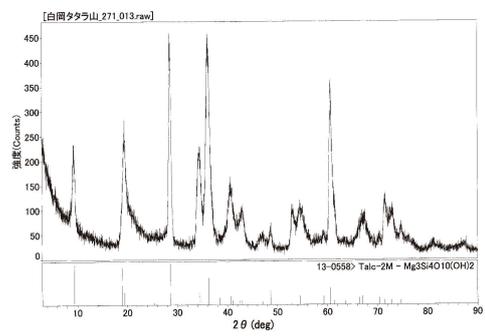
第3-10図 タタラ山10



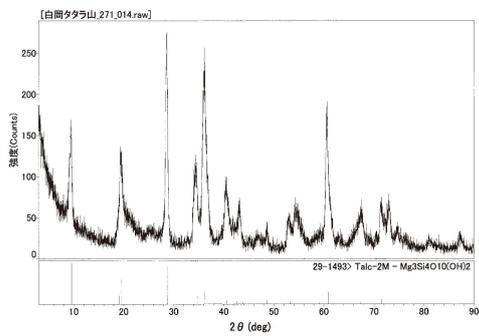
第3-11図 タタラ山11



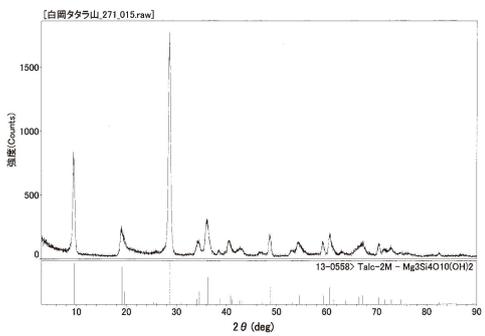
第3-12図 タタラ山12



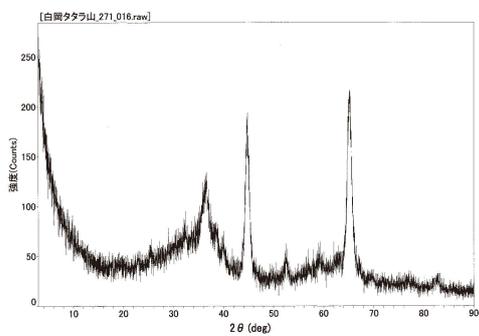
第3-13図 タタラ山13



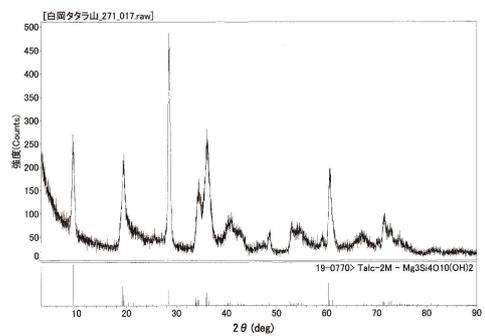
第3-14図 タタラ山14



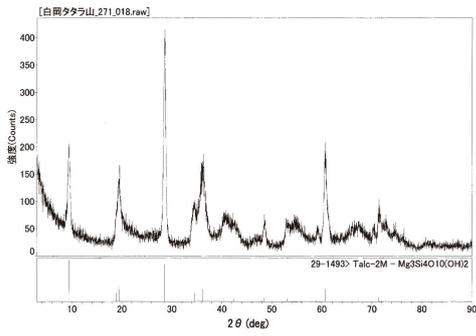
第3-15図 タタラ山15



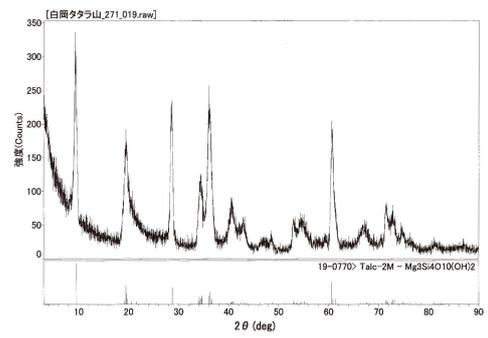
第3-16図 タタラ山16



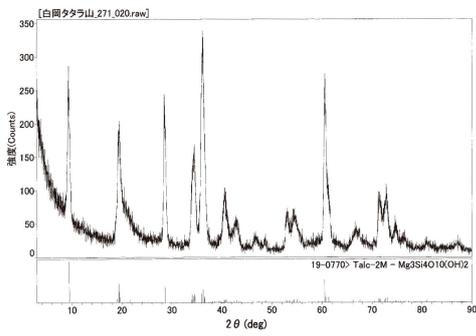
第3-17図 タタラ山17



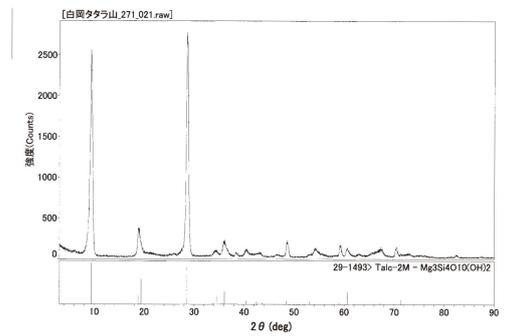
第3-18図 タタラ山18



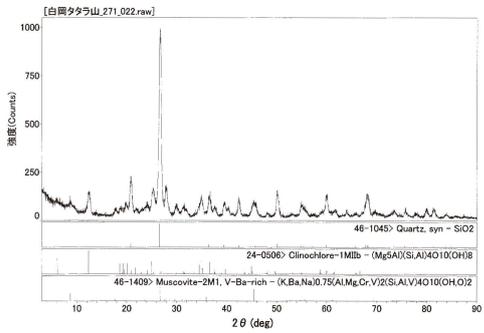
第3-19図 タタラ山19



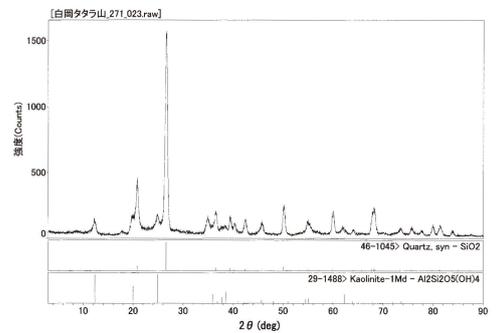
第3-20図 タタラ山20



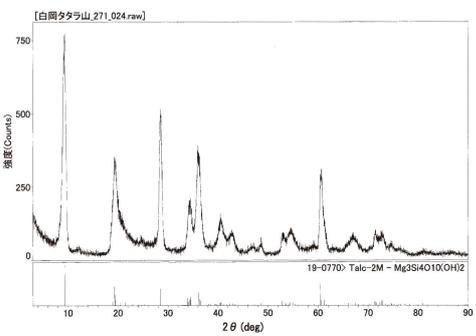
第3-21図 タタラ山21



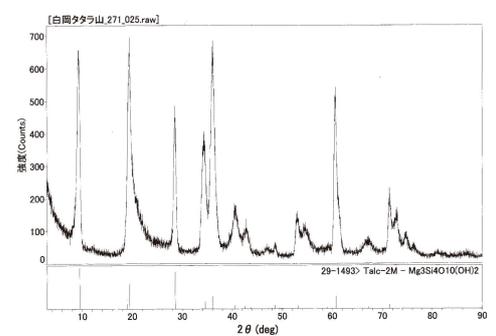
第3-22図 タタラ山22



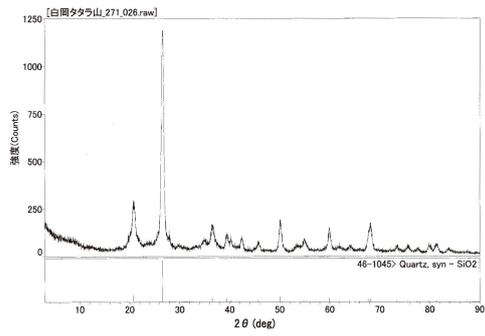
第3-23図 タタラ山23



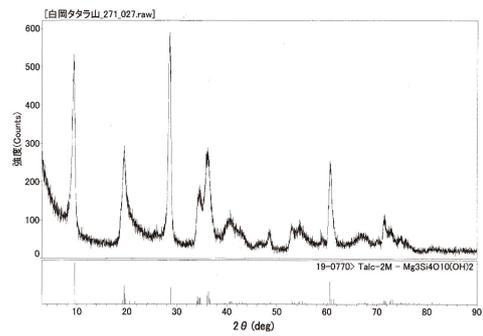
第3-24図 タタラ山24



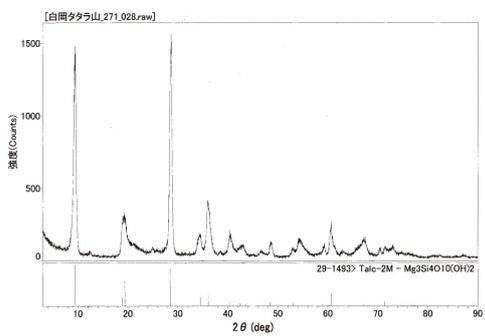
第3-25図 タタラ山25



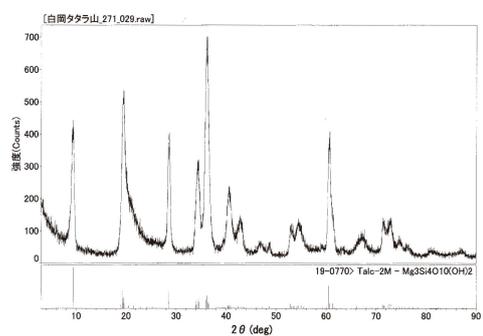
第3-26図 タタラ山26



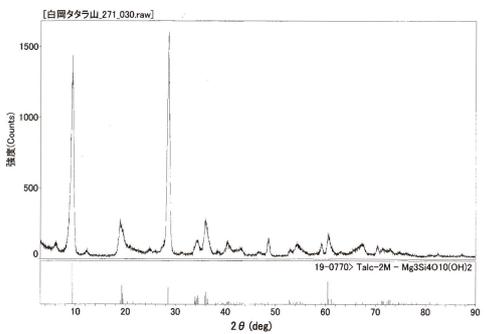
第3-27図 タタラ山27



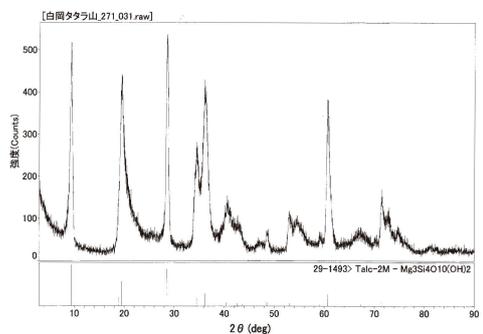
第3-28図 タタラ山28



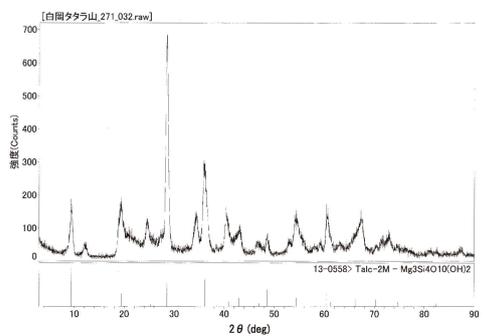
第3-29図 タタラ山29



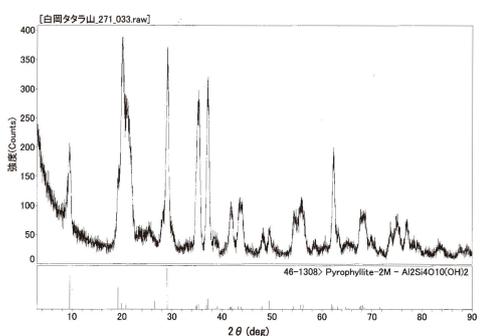
第3-30図 タタラ山30



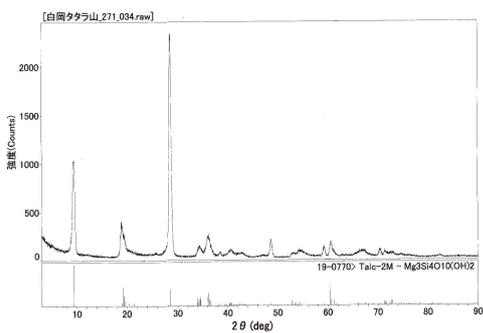
第3-31図 タタラ山31



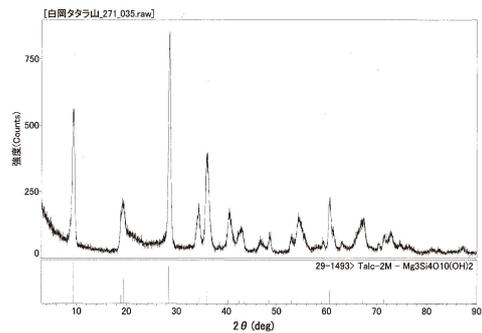
第3-32図 タタラ山32



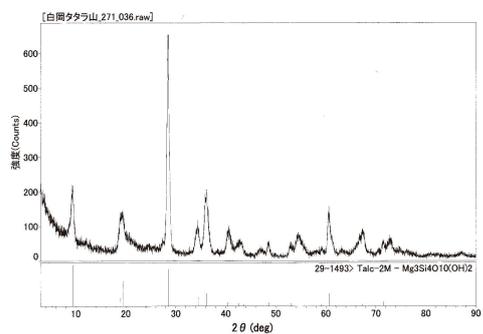
第3-33図 タタラ山33



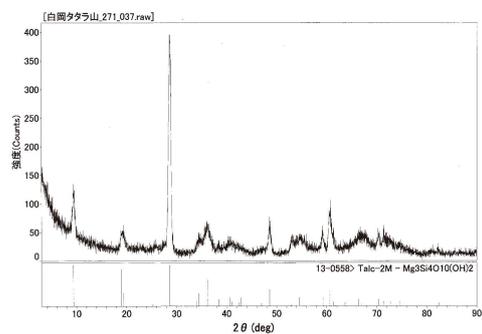
第3-34図 タタラ山34



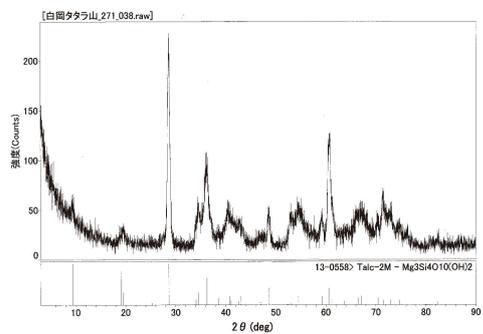
第3-35図 タタラ山35



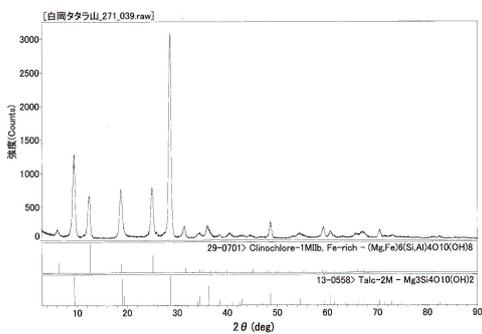
第3-36図 タタラ山36



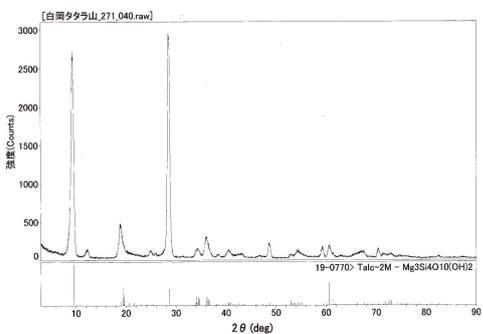
第3-37図 タタラ山37



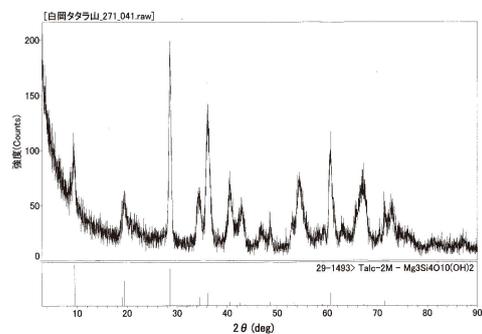
第3-38図 タタラ山38



第3-39図 タタラ山39



第3-40図 タタラ山40



第3-41図 タタラ山41

表2 被験遺物と同定鉱物名(1)

番号	遺跡名	挿図番号	集成図	出土場所	取上げ	器種	長さ/mm	幅/mm	厚さ/mm	重量/g
1	タタラ山	217-5	271図1	2地点 SK75	1	球状耳飾	25.8	30.1	9.9	6.1
2	タタラ山		271図2	5地点 D03grid		球状耳飾	22.3	25.2	9.5	7.3
3	タタラ山	257-1	271図3	2地点 C04grid		球状耳飾	15.0	15.1	11.9	3.1
4	タタラ山		271図4	1地点02号住居跡		球状耳飾	23.0	25.0	8.0	
5	タタラ山	38-16	271図5	2地点12号住居跡	295	挟状耳飾	31.4	17.7	12.7	7.9
6	タタラ山	257-2	271図6			球状耳飾	24.9	12.3	14.9	5.6
7	タタラ山	160-2	271図7	2地点42号住居跡	126	球状耳飾	25.7	15.5	12.1	5.5
8	タタラ山	257-3	271図8	2地点 E13grid		球状耳飾	17.8	9.0	19.7	3.1
9	タタラ山	147-12	271図9	2地点41号住居跡	474	球状耳飾	20.9	12.3	10.9	3.3
10	タタラ山	103-8	271図10	2地点32号住居跡	465	挟状耳飾	26.4	14.1	12.2	4.6
11	タタラ山	42-5	271図11	2地点13号住居跡覆土	7	挟状耳飾	17.6	10.3	16.2	3.4
12	タタラ山	217-3	271図12	2地点071号土坑		球状耳飾	26.3	13.1	7.3	2.9
13	タタラ山	132-2	271図13	2地点34号住居跡	262	球状耳飾	13.8	7.3	15.5	1.9
14	タタラ山	257-6	271図14	2地点 C08grid		垂飾	21.2	17.0	10.1	4.2
15	タタラ山	217-2	271図15	2地点034号土坑		垂飾	25.3	17.6	8.4	5.5
16	タタラ山	217-27	271図16	2地点 FP01		垂飾	13.3	15.4	6.6	1.2
17	タタラ山	257-7	271図17	2地点 D06grid		垂飾	11.4	14.5	5.3	1.1
18	タタラ山	257-8	271図18			垂飾	25.2	13.8	6.4	2.1
19	タタラ山	217-4	271図19	2地点083号土坑	2	垂飾	20.2	9.7	8.4	2.0
20	タタラ山	217-6	271図20	2地点100号土坑		垂飾	20.6	12.0	12.7	3.3
21	タタラ山	133-14	271図21	2地点35号住居跡	1734	垂飾	46.7	34.7	6.3	10.6
22	タタラ山	133-15	271図22	2地点35号住居跡	179	垂飾	44.4	27.9	5.8	9.8
23	タタラ山	133-16	271図23	2地点35号住居跡	1455	垂飾	36.6	20.6	5.5	4.1
24	タタラ山	103-10	271図24	2地点32号住居跡	496	垂飾	49.0	19.8	7.4	10.5
25	タタラ山	103-11	271図25	2地点32号住居跡		垂飾	36.0	20.0	7.4	6.5
26	タタラ山	133-21	271図26	2地点37号住居跡		垂飾	20.4	18.8	5.3	2.1
27	タタラ山	42-4	271図27	2地点13号住居跡	480	垂飾	19.0	11.1	8.1	2.0
28	タタラ山	76-14	272図28	2地点28号住居跡	93	垂飾	65.3	32.3	9.7	19.9
29	タタラ山	160-4	272図29	2地点43号住居跡		垂飾	35.4	21.2	10.2	8.4
30	タタラ山	217-1	272図30	2地点024号土坑		垂飾	35.6	25.4	8.4	9.1
31	タタラ山		272図31	1地点02号住居跡		垂飾	24.0	17.0	5.0	
32	タタラ山	170-9	272図32	2地点47号住居跡	12	垂飾	48.4	42.8	9.9	18.5
33	タタラ山	170-10	272図33	2地点47号住居跡	7	管玉	17.9	10.7	9.3	1.9
34	タタラ山	133-23	272図34	2地点38号住居跡		管玉	19.5	17.5	10.1	5.0
35	タタラ山	257-4	272図35	2地点 C10grid	72	管玉	20.0	14.5	8.2	3.0
36	タタラ山	257-5	272図36	2地点 B04grid	6	管玉	17.8	12.3	12.0	3.4
37	タタラ山	170-11	272図37	2地点47号住居跡		小玉	9.0	8.5	4.0	0.3
38	タタラ山	103-24	272図38	2地点33号住居跡	72	小玉	15.5	10.7	9.2	1.1
39	タタラ山	147-9	272図39	2地点41号住居跡/pit4		玉素材断片	38.3	16.1	6.1	4.2
40	タタラ山	133-19	272図40	2地点37号住居跡		玉素材断片	27.8	21.9	8.3	5.4
41	タタラ山		272図41	2地点09号住居跡	592	球状耳飾				1.2

挿図番号は、原報告原記載での挿図番号 集成図は、原報告結語の集成図中の番号 取上げは、調査時の取上げ番号

表3 被験遺物と同定鉱物名(2)

番号	所見	検出鉱物
1	主穴は回転穿孔後研磨整形 小穴は両面穿孔 抉り部は擦り切りで作出	talc
2	穴は回転穿孔後 研磨整形 抉り部は擦り切りで作出 第5地点	talc
3	穴は回転穿孔後 研磨整形 抉り部は擦り切りで作出	clinochlore
4		talc
5	主穴は回転穿孔後研磨整形 小穴は両面穿孔 抉り部は擦り切りで作出	talc
6	穴は回転穿孔後 研磨整形 抉り部は擦り切りで作出	muscovite
7	主穴は回転穿孔後研磨整形 抉り部は擦り切りで作出	muscovite
8	穴は回転穿孔後 研磨整形 抉り部は擦り切りで作出	talc
9	主穴は回転穿孔後研磨整形 抉り部は擦り切りで作出	talc
10	主穴は回転穿孔後研磨整形 小穴は両面穿孔	pyrophyllite
11	穴は回転穿孔後 研磨整形 抉り部は擦り切りで作出	talc
12	断片	talc
13	穴は回転穿孔後 研磨整形 抉り部は擦り切りで作出	talc
14	球状耳飾破損後 側面に穴をあけ垂飾に転用	talc
15	球状耳飾破損後 側面に穴をあけ垂飾に転用	talc
16	破損後 側面に穴をあけ垂飾に転用	ringwoodite, ×
17	球状耳飾破損後 側面に穴をあけ垂飾に転用	talc
18	穴は片面穿孔	talc
19	破損後 穴をあけ垂飾に転用	talc
20	破損後 側面に穴をあけ垂飾に転用	talc
21	両面穿孔 鋸歯部は擦り切り	talc
22	両面穿孔	quartzre, clinochlore, muscovite
23	両面穿孔	quartz, kaolinite
24	粗い研磨痕明瞭	talc
25	両面穿孔	talc
26	両面穿孔だが未貫通 未成品	quartz
27	穴は両面穿孔 側面に一条の溝を作出	talc
28	両面穿孔	talc
29	両面穿孔	talc
30	両面穿孔	talc
31		talc
32	両面穿孔	talc
33	両面穿孔	pyrophyllite
34	両面穿孔	talc
35	両面穿孔	talc
36	両面穿孔	talc
37		talc
38	穴は回転穿孔後 研磨整形	talc
39		clinochlore, talc
40		talc
41		talc

talc : 滑石 muscovite : 雲母族 quartz : 石英 clinochlore : 緑泥石 pyrophyllite : 蛭石 kaolinite : カオリナイト

研究紀要 第24号

2009

平成21年8月21日 印刷

平成21年8月28日 発行

発行 財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒369-0108 熊谷市船木台四丁目4番地1

<http://www.saimaibun.or.jp>

電話 0493-39-3955

印刷 株式会社文化新聞社